

# 主として“三川雑記”に拠つて概観した 天保飢饉の様相

浅見 益吉郎, 高島 功子

An Aspect of the Feature of “Tenpo-Famine”, Mainly Based  
on a Contemporaneous Memorandum, Named  
“Sansen-Zakki”.

Masukichiro Asami and Noriko Takashima

## I. 序 言

近代以前のわが国では、ほぼ完全な閉鎖経済系が形成されていたので、食糧自給体制の確立と維持がこの国土内で生活——一層ドラスチックな表現をすれば“生存”——して行くための絶対要件であったのは言うまでもない。大和民族が主食として選択したコメは、よくこの国の風土に適合し、種々の点ですぐれた特性を具えていたので、さして広くないその領域に極めて高密度の人口扶養を可能とさせた。

しかし反面、コメに対する依存度が高まり、しかもその作付限界が東北日本へ広がるにつれて、予期を上廻る気象異常や各種の自然災害に対する稲作の感受性は漸次増大して激甚な凶作が頻繁に起り、時としてこれが飢饉の発現にまでエスカレートする事態もしばしば生ずるに至ったのである。

このような飢饉発生機序の様相は、さきに筆者らが六国史を根拠として調査した上代<sup>1)</sup>から、近世末期に至るまで何ら本質的に変らなかつたように見受けられる。

それどころか、徳川政権が確立し、強固な封建体制下に二百数十年の“泰平”を保ち得た江戸期に入って以来、日本の国土は一層閉鎖性の高い無数の幕・藩領などに細分されてしまったのが災いして、生活物資、ことに食糧の円滑な流通が著しく阻害されるに至った。さらに中期以降、米穀は商業資本による恰好の投機対象となり、その価格調整も為政者の思うに任せぬ状態に陥ったため、只でさえ生活基盤の劣弱な貧農や都市

細民たちは、この時代を通じて絶えず窮乏と飢饉の不安に晒されていた。

試みに3種の資料<sup>3),4),5)</sup>を総合して関ヶ原役(慶長五年, 1600)\*より江戸開城(慶応四年, 1868)に至る269年間に、凶・飢年として採録されている年数を計上すれば、実に206カ年に達し、むしろ全江戸期を通じて、凶作ないし飢饉の記載が無い年数は全体の1/4にも満たぬ63カ年にすぎない有様である。もちろんこの中にはごく局発的な凶・飢事象も数多く算入されているので、この数字を以て、直ちに江戸時代を通じての“全国民が常に”飢饉におびやかされていたと解釈するのはいささか短絡的であろう。しかし鎖国体制下において海外からの食糧輸入はほとんど期待できず、細分化された小領域内での自給自足を建前としていたわが国では、国民の大多数にとって凶作とそれに伴って起る穀価の騰貴が、生計維持どころか死命をも制せられ兼ねない切実な問題であったのは、今日の常識で推し測れないものがある。

まして累年の凶作が広域的に発生した場合、その深刻な影響は全国的規模に及ぶ社会、経済ならびに政治上の重大事態にまで発展した事例も少くない。通常このような大飢饉は発生時の年号を冠して呼ばれ、とりわけその被害が惨烈であった享保、天明ならびに天保期の飢饉を“江戸期の三大飢饉”と称している。これらに関する諸資料の収集や実態の調査、研究は既に剩すところなく行われているので<sup>3),5~13)</sup>、驥尾に付すべき余地もほとんど残されていないが、本稿では近世最

\* 以下和暦年は漢数字、西暦(太陽暦)年は算用数字を用いる。

後の大飢饉である天保飢饉の最中に多感な青年期を過ごし、異常なまでの強い関心を以てその推移を観察し、かつ丹念に関連情報を収集した一儒生の筆録である“三川雑記”<sup>14)</sup>\*を主たる根拠として、この期の飢饉の実態追究を試みたい。

本論に入るに先立ち、著者、山田三川と三川雑記についての概要を紹介しておく必要があるだろう。

## II. 山田三川と三川雑記

### 1. 山田三川の人となり

山田三川〔名：飛，諱：載飛，字：致遠，別号：四有，通称：三郎〕は文化元年（1804）伊勢国三重郡平尾村の里正で医を兼ねた素封家、山田孝純の3男として生れ、文政四年（1821・17才）伯父の藤堂藩督学、津阪東陽に身を寄せて、折柄藩校に招聘されていた名儒、斎藤拙堂の薫陶を受けた。八年（1825・21才）伯父の意に反して江戸に出奔し、幕儒、古賀侗庵<sup>とら</sup>に入門、憧れの官学、昌平校への入学を許された。以後天保九年（1838・34才）150石5口の高禄を以て松前藩儒として仕えるまでの間、昌平校に在籍し、舎長として後進の指導に当ると共に、当代の碩学、松崎慊堂<sup>とら</sup>の知遇を得て師事し、先輩で後に名を為した安井息軒、塩谷宕蔭をはじめ、藤田東湖、小宮山楓軒、羽倉簡堂、渡辺華山、大槻盤溪、安積良斎等、史上に名を遺す当時の一流人士とも親交を結んだ。嘉永元年（1848・44才）故あつて松前藩を辞し、一時下総、水海道に身を潜めたが五年（1852・48才）、上州、安中藩主、板倉勝明の招きに応じて同藩の教学と藩政に数々の功績を遺し、文久二年（1862・58才）同地に歿した。

### 2. 三川雑記の特質

三川雑記は天保四年より弘化四年（1833～47）にわたる著者の見聞雑録で、遺稿となっていたものを、外孫に当たる弓削田精一（元朝日新聞大阪通信部長、昭和十二年歿）により保管整理され、後、水海道の医師で三川研究家でもあった富村登の手に移り、昭和四十七年、息富村太郎によってはじめて公刊されたものである。天保十年（1839）に至るその前半部は天保飢饉の時期を完全に包括しているが、何故か天保六年（1835）および十一年（1840）の記事が一切失われているのが惜まれる。

この時期、著者三川は全国各藩より選抜された秀才が集まる昌平校の中核的な儒生であり、彼等がもたらす郷藩の動向や前述の知名師友から得た機微にわたる

諸情報は勞せずして彼の耳目に達し得る極めて恵まれた立場にあった。彼のごとき存在は、現在のような各種報道システムが皆無で、通信手段も全く不十分であった当時あっては稀有に属するものであったといえよう。

加えて三川は津藩士であった次兄の弟なる故を以て資格\*を整え、昌平入学を許されたのであるが、前述のように彼の出自は常に農民との接触の多い里正（大庄家）の家柄だけに、専攻する儒学を単なる教養の目的だけでなく、実学的学殖を蓄えて、これを経世済民の場に活用したいという意欲に燃えていたのは当然であろう。

この雑記はまさに、他日このような機会が得られた時を予測しての実務資料集的性格が強く、市井の民俗・茶飯事をはじめ、公儀・諸藩の内情動向、海外事情、故事逸話から農事・医療・殖産等に至るまで、凡そ何かの参考になると判断した知見、情報を見聞するままに雑然と筆録している。まして眼前へ無気味に迫ってくる飢饉の脅威に、彼が重大な関心を向けぬ筈はなく、収録されている関連情報の量は、全篇のおよそ1/10にも達するであろう。

以下、焦点を雑記に収録された天保飢饉関連記事に絞り、その内容の検討を試みたい。

## III. 三川雑記に筆録された天保飢饉

### 1. その資料的価値

雑記に収録されている飢饉関連記事は、約900項にも上るがこれを地域別、年次別に分類、集計したのが表1である。

これを一覧すれば、当時の三川の居住地であり、かつ最も情報の集中する江戸を除けば、連年の凶作で最も直接的な飢饉の惨害を蒙った奥羽諸藩領の記事が圧倒的に多いのは当然である。関東諸州および信州がこれに次ぎ、彼の生国、伊勢よりもたらされた情報がかなり多いのも首肯できる。これに対して畿内以西、ことに山陰の記事が極めて少いのは、被害の中心地域が偏東的であったとはいえ、その深刻な影響は西日本でも決して免れ得なかったといわれる天保飢饉の実態よりすれば、彼の情報網にもいささか不備があったと考えられぬでもない。

\* 昌平校は元来幕臣子弟の教育機関であったが、諸藩の子弟にも“書生”として入学を許した。ただしその資格として、藩士ないしその処士（部屋住み）であることと、幕府儒官の門下に在籍していることを条件とした。

\* 以下、標題以外の箇所では単に“雑記”と記す。

表1 三川雑記に記載された飢饉関連記事項目の年次別・地域別集計

道	国(地)名	天保三	天保四	天保五	天保七	天保八	天保九	天保十	天保十二	計	
東 山 道	蝦夷		4	1	3				1	9	
	陸奥	5	65	34	26	7	6	2	3	148	
	(津軽)	(1)	(24)	(5)	(6)			(1)		(37)	
	(南部)	(3)	(28)	(8)	(4)	(1)				(44)	
	(仙台)	(4)	(13)	(9)	(9)	(2)	(3)		(2)	(42)	
	(その他)		(12)	(6)	(6)	(4)	(3)	(1)		(32)	
	出羽	1	33	27	11	2			1	75	
	(秋田)		(11)	(13)	(1)					(25)	
	(米沢)		(7)	(5)	(4)				(1)	(17)	
	(新庄)		(5)	(6)	(1)	(1)				(13)	
	(その他)	(1)	(11)	(2)	(2)	(1)				(17)	
	下野		1	9			3				13
	上野	1	1	11	5	4					22
	信濃			9	7	10	5	1			32
飛騨										0	
美濃					3		1			4	
近江			1		2					3	
東山道			3		2	1				6	
小計		7	117	89	62	22	8	2	5	312	
北 陸 道	越後		3	2	4					9	
	佐渡		1				2			3	
	中能登	1	5				3			9	
	加賀		2							2	
	前狭	1	4		1	1	3			10	
	北陸道			1			1			2	
小計	2	16	3	7	1	9	0	0	38		
東 海 道	常陸	1	5	9	7	5				27	
	下総		2	9	1	3				15	
	上総		3	7		4				14	
	安房	1	3	7		3				14	
	武蔵	3	55	43	87	44	13	3	1	249	
	(江戸)	(3)	(54)	(33)	(84)	(38)	(13)	(3)	(1)	(229)	
	相模		2	11	2	3	2			20	
	甲斐		1	1	8	2	1			13	
	伊豆		1		1	1				3	
	駿河		1	4	1		1			7	
	遠江			1	5	2				8	
	三河			1	1					2	
	尾張			3	3	10	3	1		20	
伊勢							1		1		
伊賀					1				1		

道	国(地)名	天保三 ~	天保四	天保五	天保七	天保八	天保九	天保十	天保十二 ~	計
	東海道		2	2	5	3	1			13
	小計	5	78	98	131	73	20	3	1	409
畿内	山攝		2		1	9				2
	(大		1			(9)				11
	河和		(1)		1					(10)
	大畿			1	1		1			1
				1		1	1			1
	小計	0	4	1	4	10	1	0	0	20
南海道	紀淡				1		1			2
	阿讚			1	1	1	2			0
	伊土				1	1	1			5
	南				2		1			3
	海				1		1			3
	小計	0	0	1	8	2	6	0	0	17
山陰道	丹丹		2		1					3
	但因									0
	伯出									0
	石隱				1	1				0
	山				1					2
	小計	0	2	0	3	1	0	0	0	6
山陽道	播美		2	1	2	1				6
	備備					1				1
	備安			2			1			0
	周長			1		1	1			3
	山				2	1				3
	小計	0	2	4	13	5	2	0	0	26
筑前	筑		1		2	1				4
	筑									0
	豊				2					2
筑後	筑				2					2
	豊				2					2

道	国 (地) 名	天保三	天保四	天保五	天保七	天保八	天保九	天保十	天保十二	計
西 海 道	肥 前		3			1				4
	肥 後		3	2					2	8
	日 向				1			1		1
	大 隅									0
	薩 摩				3			1		5
	壱 岐			2					1	0
	対 馬									2
琉 球									0	
西 海 道		3	1	1	1		1			7
小 計		3	8	5	11	2	3	1	2	35
そ の 他	全 国		5	2	4	4	1			16
	朝 鮮			3	1					4
	中 国				1	1				2
	口 シ ア	3	2							5
	そ の 他	2		2	7	2			1	14
小 計		5	7	7	13	7	1	0	1	41
合 計		22	234	208	252	123	50	6	9	904

表注 1 陸奥および出羽の ( ) 内はいずれも藩領を示す。1項目の記事中に複数の藩領についての記載があったり、或いは単に“陸奥”とだけ記して、藩領名の記載のないものもあるので、国ごとの集計数は、各藩領集計数の合計とは必ずしも一致しない。  
2 (江戸) および (大阪) は、それぞれ武蔵および摂津の内訳数である。

既述のように、雑記に天保六年の記事が全く失われているのは、このような目的の根拠資料とするのに致命的な欠陥とも考えられぬではないが、荒川<sup>13)</sup>によれば、この年は前年の作柄がかなり持ち直したため、ほぼ全国的に小康を保ち得たとされているので、むしろ表1は数年にわたった天保飢饉のピーク期を前半(四、五年)と後半(七、八年)に分けてその様相を比較する目的にはかなり参考となるであろう。

## 2. 奥羽と江戸の様相

とくに興味深いのは奥羽両州と江戸との記載数の経年推移で、表2のように、両地の項目総数では大差を示さないが、生産地である奥羽では前半に圧倒的に集中し、消費地の江戸では後半にかなりの増加を示して

表2 天保飢饉の前、後半期における奥羽と江戸との記載項目数比較

	前 半	後 半	計
	天保四、五年	天保七、八年	
奥 羽	159 (77.6%)	46 (22.4%)	205 (100.0%)
江 戸	87 (41.6%)	122 (58.4%)	209 (100.0%)

いる。

これは、文政末年頃より断続的な違作で疫弊の兆を示していた東北各地の農民が、皆無に近い天保三・四年の大凶作に遭って早くもその前半より多数の犠牲者を出していたのに対し、江戸市民も早くから食糧の欠乏と諸色の高騰に痛めつけられてはいたが、破局的な窮迫状態に達したのはその後期に至ってからであったという、天保飢饉の実態とよく一致を示すと考えられる。

天保八年(1837)に集中している摂津(大阪)の記事は、いうまでもなく、天下を震撼させた“大塩の乱”の関連情報で占められているが、これに関しても後に論じたい。

## 3. 三川雑記の内容

雑記に記述された飢饉関連項目を、全国と江戸について、その内容事項別に分類、集計したのが表3であるが、1項目に複数の内容事項を記載したものもかなり多いので、表1の数字とは当然一致しない。

これを一覧しても、三川が眼前に進行してゆく飢饉の経過に只ならぬ関心を示し、次々と耳目に触れる関連事象を及ぶ限り漏れなく収集、把握しようと努めた

表3 三川雑記に記載された飢饉関連記事の内容事項別集計 {大 字…全国  
( 内…江戸

分類	事 項	天保三 ~	天保四	天保五	天保七	天保八	天保九	天保十	天保十二 ~	計
I 民情・動向	1 餓死, 疫死, 変死	5	10 (2)	16 (1)	10 (1)	10 (5)				51 (9)
	2 人口減, 遺棄, 自殺	2	5 (3)	5 (1)	5 (4)	1 (1)				18 (9)
	3 浮浪, 逃散, 乞食	1 (1)	13 (2)	5	8 (5)	9 (3)			1	37 (11)
	4 窮乏, 飢餓, 疫病	1	11 (1)	12 (2)	28 (13)	11 (2)	1 (1)			64 (19)
	5 民情, 景況, 流言	3 (3)	26 (13)	14 (4)	32 (11)	15 (2)	4 (2)			94 (35)
	6 治安, 盜賊, 放火		9 (2)	9 (1)	22 (9)	4 (1)	2 (2)			46 (15)
	7 一揆, 打毀, 暴動	2	11	10 (2)	17 (1)	10	3			53 (3)
	小 計	14 (4)	85 (23)	71 (11)	122 (44)	60 (14)	10 (5)	0 (0)	1 (0)	363 (101)
II 農業・気象	1 米 作 況	2	29	15	43	5	2			96 (0)
	2 他作物作況, 漁況		10	20 (1)	3 (1)	14	1			48 (2)
	3 気候, 気象異常		17 (5)	17 (10)	17 (12)	33 (22)	22 (8)		3 (1)	109 (58)
	4 自然災害	1	11	3	10	2	7			34 (0)
	5 その他の異変	1 (1)	1 (1)	7 (1)	9	1 (1)	2			21 (4)
小 計	4 (1)	68 (6)	62 (12)	82 (13)	55 (23)	34 (8)	0 (0)	3 (1)	308 (64)	
III 食糧	1 流通, 輸送, 調達	1	17 (2)	7 (1)	12 (6)	4				41 (9)
	2 保有, 管理, 備蓄	3	19 (6)	5	16 (2)	5 (2)			1	49 (10)
	3 流通・価格規制	1	5 (1)	1 (1)	5 (4)	2 (1)				14 (7)
	4 消費・用途規制		9 (2)		4 (1)	1		1		15 (3)
	5 代用食, 增量食	1 (1)	8 (6)	7	16 (4)	5	2 (1)		1	40 (12)
	6 食糧品質		1 (1)	2 (2)	4 (1)	2 (1)	1			10 (5)
小 計	6 (1)	59 (18)	22 (14)	57 (18)	19 (4)	3 (1)	1 (0)	2 (0)	169 (46)	
IV 経済	1 米 価	1 (1)	35 (10)	20 (15)	15 (8)	12 (6)	2 (1)	1 (1)		86 (42)
	2 その他の物価, 宿賃	1 (1)	9 (7)	2 (1)	22 (15)	4 (1)		1		39 (25)
	3 給与, 賃金, 雇傭, 生計	1 (1)	14 (9)	9 (5)	16 (6)	5 (3)				45 (24)
	4 融資, 金利, 錢貨		3 (1)	5	8 (6)	2 (1)		2		20 (8)
	5 経済破綻		2 (1)	1 (1)	3 (1)			3	1	10 (3)
	6 経済事犯, 不正, 隠匿		9 (1)	2	12 (4)	2 (1)	1	3 (1)		29 (7)
小 計	3 (3)	72 (29)	39 (22)	76 (40)	25 (12)	3 (1)	10 (2)	1 (0)	229 (109)	
V 政 治	1 幕 政, 幕 令	1 (1)	17 (9)	4 (2)	34 (27)	17 (6)	4 (2)	2	1	80 (47)
	2 藩 政, 藩 令		43 (1)	20 (2)	34 (1)	10 (3)		3	2	112 (7)
	3 民間対策	1	4 (3)		1	2				8 (3)
	4 救恤, 賑給, 放出		7 (7)	4 (1)	21 (13)	5 (1)	1		2	40 (22)
	5 貢 租, 冥 加 金			2	4	1 (1)		1 (1)		8 (2)
	6 防疫・医療対策		1 (1)	1 (1)	1		1 (1)			4 (3)
小 計	2 (1)	72 (21)	31 (6)	95 (41)	35 (11)	6 (3)	6 (1)	5 (0)	252 (84)	
VI その他	1 祈禱, 祈願, 迷信		2	2 (1)	2 (1)		1			7 (2)
	2 経験, 通則, 慣習	2	3	5 (2)	11 (3)	1	3	1		26 (5)
	3 頭 賞, 美 談	1 (1)	1 (1)		2 (2)	2			2	8 (4)
	4 処 罰, 非 難		1	1 (1)	7 (6)	3 (3)	1 (1)			13 (11)
	5 諷 刺, 批 判	1 (1)	1		16 (8)	14 (2)	3 (2)		1	36 (13)
小 計	4 (2)	8 (1)	8 (4)	38 (20)	20 (5)	8 (3)	1 (0)	3 (0)	90 (35)	
合 計		33 (12)	364 (98)	233 (59)	470 (176)	214 (69)	64 (21)	18 (3)	15 (1)	1,411 (439)

熱意が理解できよう。とりわけ彼自身が肌で感じとることができる江戸市中の情況推移は的確に把握されており、民心が不安から自棄荒廃、さらには沈滞無気力化して行く過程や、食と職を求めて各地から市中へ流亡して来る逃散農民や浮浪者の生態も、時を追って克明に観察しているのが注目される。

各地の米麦作況と気象との関連性も彼の重大関心事で、気象異常や自然災害とその被害程度に関する情報も努めて広範囲に収集している。

裕福な実家を持つ彼自身が経済的に困窮していた形跡は、雑記の内容からはうかがわれないが、米価や諸物価の動向、さらには食糧の流通管理に関する情報もかなり詳細に記録されている。また彼も土籍にあるだけに、直接幕臣の生計に響く蔵米相場の変動や諸藩士の国許や江戸における給与状況についての記載も少ない。

#### 4. 三川の筆録姿勢と視点

しかし、当初は飢饉の進行を比較的客観的に見守り続け、忠実克明な情報収集を第一義的とする態度を執っていたと思われる三川も、漸く飢饉という現象の中に包蔵される“人災”的要素が決して少くないことに気付きはじめるに従い、雑記の中には筆鋒鋭く公儀や諸藩の政策の問題点を指摘し、その裏面に論及する記事が目立ち始める。すなわち彼は、飢饉の単なる“観察者”の地位にあきたらず、次第にその根因を摘発、究明しようとする“批判者”的立場への姿勢転換を意図するに至ったと、筆者らは考えるのである。

幕・藩政の機微に触れる“極秘”情報が、彼ごとき一介の書生に果してどのようなルートから入ったのか、或いは入手したこの種の情報がどの程度の信頼性を持つものであったかの吟味は、今後厳密になされるべきであろうが、もしそれらの確度を信ずるならば、正義感溢れる青年、三川ならずとも、中央、地方を問わず政治の要路にあった人々の恣意や苛政を糾弾し、無能と愚策に拒腕したくなる念を、我々とても禁じ得ない。

このような悪政の犠牲となった飢人たちが市中の路傍にうづくまり、肩息づかいに目だけをピカピカ光らせながら死んでゆく状の目撃記事（天保八年）の文末に記された“……可憐可憐”。に、彼の万斛の感慨がにじみ出ているように思われる。

#### 5. 記事内容の信頼性

雑記の各項目には、そのすべてではないが、当該情

報の提供者と覚しき氏名が付記されている\*。しかし彼と交際のあった知名人士以外、それが何びとかを探るのは容易でない。恐らくそのほとんどは昌平の舎生か、古賀塾又は松崎塾の同門であろう。この他にも“郷書”あるいは“某ヨリノ来信”と記されているものも多く、このように典拠は比較的是っきりしているものの、その内容が多岐にわたっているため、その一々について事実であったか否かを同定するのは不可能に近い。

そこで、事項を表3・I-7に掲げた“一揆、打毀、暴動”に限り、雑記の記事となっている53件を、この関係の研究業績として定評のある青木の著書<sup>15)</sup>の附録年表によって検索を試みたところ、53件中4件については該当する事実を年表中に見出し得なかった。しかしその他は、時日、発生場所について多少の相異点が見られるものもあったが、ほぼ雑記の記述に該当すると推定できる事件と同定することができたので、少くともこの項に関してはかなり信頼性が高いものと判断される。

## IV. 考 察

### 1. 飢饉の機序

天保飢饉の概勢を把握するには、小鹿島<sup>5)</sup>が引用している“古老実験”の記事が最も要を得て説明しているように思われるが、この時代を去る約80年前の宝暦飢饉（元年～五年、1751～55）ならびに約50年前の天明飢饉\*\*（二年～八年、1782～88）と本質的に軌を一にした“冷夏一不順気型”の凶作が根本原因となったことは異論なく認められている。

気象学的に見れば、夏季に入っても冷氣塊であるオホーツク高気圧の勢力が何らかの原因で衰退せず、これより本州東岸に向けて吹き込む冷湿な北東風（やませ風）が異常低温をもたらすと共に、梅雨前線を混乱ないし刺戟して、列島全域に不順な天気を醸成するが、西南日本に対する影響は比較的小さい。

このような気象異常は通例、数カ年にわたって連続発生し易いので、累年の違作が絶糧状態を惹き起し、これが窮極的に飢饉の発現に至るものと解釈され勝である。しかし飢饉の過程と実態を仔細に観察すれば、決してそのような単純な直線的パターンで割り切れるものではない。事実、明治以後にも同程度の連年凶作が何度か起っているが、少くとも餓死者が出る程の事態に至った例は一度も知られていないのである。

\* 中には“カミユイ”と記されたものもあり、江戸市民の情報交換場の機能を果していた髪床で仕入れた噂話をも収録していたことがわかる。

\*\* 天明三年の浅間山噴火による降灰の被害も冷害と相乗的に作用し、江戸期最大の飢饉となった。

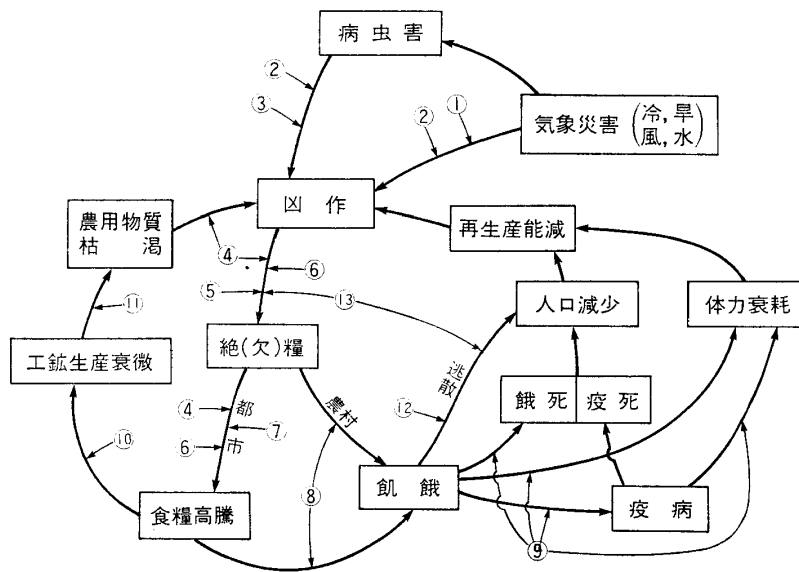


図1 わが国における飢饉発生の様式図

- 対策 ① 農業技術改善      ② 作付転換      ③ 防除  
 ④ 備蓄放出, 調達 (食糧, 資材等)      ⑤ 消費規制, 節約  
 ⑥ 代用・增量食摂取      ⑦ 食糧流通管理      ⑧ 救恤, 賑給  
 ⑨ 加療看護      ⑩ 生業補助      ⑪ 生産奨励措置  
 ⑫ 慰撫, 還農      ⑬ 貢租減免

筆者らは、かつてわが国で発生した大規模飢饉は、大抵の場合、図1の様式図に示すような循環形式をとって進行しており、天保飢饉もその例に漏れないものと理解している。

すなわち、異常気象ないしそれが一因となって発生した病虫害によって生じた凶作が昂じて、飢饉状態さらには餓死者の発現に至る過程が存在する他に、飢饉時の非常救荒食の摂取や貧窮化による衛生水準低下による疫病さらには疫死者の発生が飢饉現象に拍車をかけた事例（むしろ疫病ないし疫死の被害の方が大きかった事例）が多々存在すると推察する。このような事態が、農村からの住民の逃散と相俟って農村の人口減少による荒廃を招き、栄養失調による体力低下も伴って、農村の再生産力を著しく減退させ、翌年の食糧生産に甚だしい障害となった例は、一旦発生した飢饉の規模が大きい程多く見られるのが通例であった。

一方、都市住民にも、絶糧ないし食糧高騰の影響が著しくなれば、農村と同様に餓・疫死に至る者が出るだけでなく、農村における生活・生産必需品の供給力も衰え、飢饉被害の悪循環に一層拍車をかける結果を招いたことは容易に推察されよう。

このような循環を絶ち切るには、図1に付記したような、然るべき諸対策を適時に実施すれば極めて有効であり、また幕・藩の為政当局者にはそれらを実行す

べき責任があったにも拘らず、天保飢饉に際しての対策には一貫性がなく、精々当面糊塗的なものに終始した\*点は、三川も数多く指摘しているところであり、窮極的に国民の信頼を裏切って封建体制崩壊の遠因となったのは明らかである。

## 2. 天保飢饉の影響

前後7～8年に及んだこの大飢饉も、天保十年には一応の終熄が見られ、雑記中の関連記事もこれ以降目立って減少している。しかし飢饉の及ぼした影響は決して一過性のもではなく、漸く弱体化の兆しを見せはじめた幕藩体制を大きく揺がせる結果を招いた。

まづ幕府にとって衝撃的であったのは、飢饉最盛期の天保八年（1837）初頭、天下の台所、大阪で勃発した大塩の乱であろう。僅か1日で鎮圧されたとはいえ、丁度200年前の天草の乱（1637～38）以来、幕府に対して公然と弓を引いた者はかつて無く、しかもこの反乱が微禄とは言え、幕府直臣で高名な陽明学者でもあった中斎、大塩平八郎を首魁として企てられたことが、まさに晴天の霹靂であったに相違ない。

逸早くその報を得た三川は、この一挙を民衆の塗炭の苦しみを見るに忍びず遂行された“快挙”として、ほとんど無条件で讃美している。しかし彼の師で大塩

\* 飢饉の“人災的要素”とは、まさにこのような面を意味するのである。



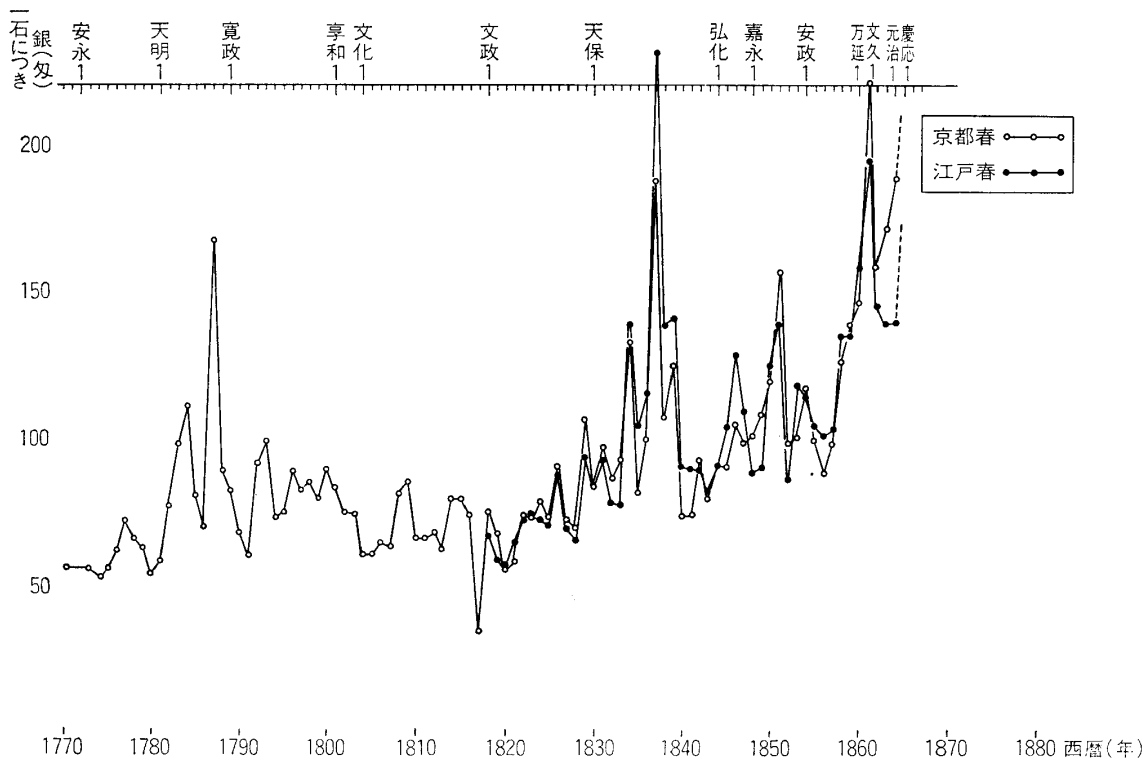


図2 天保飢饉前後の米価の推移 (越後屋呉服店の「小遣目録」による)

とも面識のあったと思われる松崎慊堂\*はその日記<sup>17)</sup>に、単に知り得た事件経過のみを記し、慎重に一切の論評を避けており、前平戸藩主で文雅英明の隠居であった松浦静山はその随筆<sup>18)</sup>に、一層詳細な事件の顛末を記してはいるが、これを論外の“秩序破壊行為”として、頭ごなしに“塩賊”と罵っている。このように同時代に生きた人々の、この事件に対する評価、反応を比較するのも興味深く、三川の思潮傾向が当時としてはかなり“急進的”であったことも判断し得るであろう。

ともあれ、天保飢饉によって幕藩体制はその為政能力の限界をさらけ出し、財政的にも破綻を来してその崩壊を早める結果を招いたことは確かである。以後、幕政瓦解に至る三十余年の過程は本稿で論ずる必要もないが、図2〔文献<sup>10)</sup>より引用〕で例示する幕末の米価の推移を見てもわかるように、この飢饉を契機として日本経済は極端な悪性インフレの状態に陥り、その収拾もつかぬままの姿で明治維新を迎えてしまったことは銘記されるべきであろう。もし天保飢饉が発生していなければ、わが国の近代化の道程も、その出発点から異っていた筈である。この意味よりしても、150年も昔のこの飢饉が決して現代と無関係な出来事ではなかったと、筆者らは確信している次第である。

\* 慊堂は隠居はしていたが老中、太田資始(掛川藩主)の儒臣であり、10家以上の諸侯邸に出講していて、微妙な立場にあった。

### 参 考 文 献

- 1) 浅見益吉郎：“続日本紀に見る飢と疫と災”，本誌34, 32 (1979).
- 2) 浅見益吉郎，新江田絹代：“六国史後半に見る飢と疫と災”，本誌35, 24 (1980).
- 3) 司法省刑事局編：“日本の飢饉資料”，司法省(1932).
- 4) 遠藤元男：“近世生活史年表”，雄山閣 (1982).
- 5) 小鹿島果：“日本災異誌”，日本鉱業会 (1884).
- 6) 梅森三郎：“凶荒史”，有隣堂 (1893).
- 7) 権藤成卿編：“日本震災凶饉攷”，文芸春秋社 (1932).
- 8) 小野武夫編：“日本近世飢饉志”，学芸社 (1935).
- 9) 西村真琴，吉川一郎共編：“日本凶荒史考”，丸善 (1936).
- 10) 森嘉兵衛，谷川健一編“日本庶民生活史料集成・第7巻<飢饉，悪疫>”，三一書房 (1970).
- 11) 荒川秀俊：“飢饉”，教育社 (1979).
- 12) 中島陽一郎：“飢饉日本史”雄山閣 (1976).
- 13) 特集“江戸時代の飢饉”<歴史公論，2, 8>，雄山閣 (1976).
- 14) 山田三川(富村登編)：“三川雜記”，吉川弘文館 (1972).
- 15) 青木虹二：“百姓一揆の年次的研究”，大原新生社 (1966).
- 16) 小野武夫編：“江戸物価事典”，展望社 (1982).
- 17) 松崎慊堂：“慊堂日歴”・5，平凡社東洋文庫 (1980刊).
- 18) 松浦静山：“甲子夜話三篇”・3，平凡社東洋文庫 (1983刊).